

西俊輔の「毎日楽しく」

Vo1.116 2015年4月号

先月3月20日は地下鉄サリン事件が起きてからちょうど20年目にあたる節目の年だったそうです。この事件を起こしたオウム真理教以前にも、日本赤軍など、民間人を対象にしたテロでたびたび世界を驚かせてきた日本ですが、少なくともサリンという化学兵器を使って民間人をターゲットにしたテロは世界初だったそうです。そういえば最近、世界の各地でたびたび起きている「自爆テロ」が世界で初めて行われたのは日本赤軍によるものだったというテレビの特集番組をやっていましたが、こうした不名誉な世界初はそろそろ終わりにしてほしいものです。

この地下鉄サリン事件をきっかけにオウム真理教による一連の犯罪が明らかになっていくわけですが、驚いたのは信者の中に東大や京大、早稲田や慶応といった学歴の高い人達が多かったことと、医師や弁護士など社会的に地位の高い人達が多かったことです。たぶん日本中の誰もが、なぜあんな学歴の高い人達がこういう組織犯罪に手を染めることになったのか、という疑問を持ったと思います。もちろん、最初から犯罪を行っていたわけではないでしょうから（たぶん）、こうした人達が入信した当初は純粋な宗教活動がメインだったのかもしれませんが。そうすると、教祖だった麻原という人が実際の人間性はさておき、信者にとってはいかに魅力的な人物だったかということも一面では言えるのかもしれません。

私はいかなる宗教であれ、会社のような組織であれ、現在まさに生きている誰かを盲信することには慎重であるべきだと思っています。人間である以上、どんなに立派な人であれ、間違いをおかす可能性があるからです。キリストのように神の子（という解釈）であればあてはまりませんが、仏教の開祖であるブッダですら、妻と子を捨てて出家したそうですから、父親としてみれば失格だったということが言えるのかもしれません。

生きている人そのものを盲信せず、何に救いを求めればよいかといえ、私は仏教にしろ、キリスト教にしろ、宗教や哲学の教えそのものに救いを求めるのがいいと思っています。2000年以上もの間、気が遠くなるほど多くの人達によるチェックを経て現在まで引き継がれている宗教や哲学はまさに人類の英知であり、それこそ神の教えに近いと思われるからです。ただ、せっかくの神の教えも人によってさまざまに解釈されることが問題ではありませんけど…。

